甲虫コレクションガイド 9
神奈川県立生命の星・地球博物館

苅部治紀
〒 250-0031　神奈川県小田原市入生田 499　神奈川県立生命の星・地球博物館

Beetle Collection of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Haruki Karube

当館は，神奈川県西部の箱根の入口に位置し，行政区では小田原市と箱根町の境に存在する．横浜市中区の旧県立博物館（当時は歴史博物館と同一の建物）からのコレクションを引き継いでいるために，所蔵される昆虫コレクションは多数存在している．その中でも甲虫類のそれは，地方博物館の中でも相当に充実していると考えられ，重要なコレクションも多く保管されている．

これは，昨年逝去された高桑正敏さんが，旧県立博物館時代からの昆虫担当学芸員であり，日本を代表する甲虫研究者の一人として，活発な活動を継続されてきたことが大きい．高桑さんは，ご自身のライフワークとしてのカミキリ，ハナノミの分類学的な研究のみならず，「上野俊一先生に鍛えられた」という英語能力を活かして，研究者が新種記載を進める際に英文校閲で支えることでも，学会に重要な貢献をしてきている．結果的にそうした校閲された論文のタイプ標本の寄贈も多く行われてきた．以下，当館に所蔵されている代表的な甲虫コレクションについて紹介する．

タイプ標本

所蔵されるタイプ標本は多岐にわたるが，高桑さんの研究対象だった多数のハナノミ類，カミキリ（高桑さんだけではなく，ベトナムのネキなどの共著のもの，藤田宏さんや新里達也さんらの記載種を含む）を筆頭に，永井信二，水沼哲郎両氏らの世界のクワガタムシ類や，土屋利行さんの日本産コクワガタ亜種を含むクワガタ類（図 1），酒井香氏のハナムグリ類，和田薫氏のコガネムシ類，高橋和弘氏のジョウカイボン類などが代表的である．蛇足だが筆者の記載したベニボシカミキリ類なども含まれている．

阿部光典氏の世界のゲンゴロウコレクション

阿部氏が収集されたゲンゴロウ類を主としたコレクションで，登録されたもので 479 種，30,619 点に及ぶ．水生甲虫屋のはしくれとして見ても，情報の少ない当時によくぞこれほど収集されたと思わされるコレクションであり，世界中の研究者との交換で入手された海外産のものも多数含まれている．著名な大型ゲンゴロモドキ *Dytiscus latissimus*（図 2）のほか，現在では絶滅した産地の標本も多く，たとえば地域絶滅したと考えられる京都府産のマダラシマゲンゴロウもしっかり収蔵されている．2011 年に開催した特別展「およげ！ゲンゴロウくん」でもその一部を出品した．

永井信二氏の世界のハナムグリコレクション

カブトムシ，コガネムシ類の研究者として著名な，永井氏の収集された世界のハナムグリのコレクションで，受け入れ時点で 1,342 種，20,175 点に及ぶ．東南アジア，アフリカなどの地域のものがとくに充実している．タイプ標本もかなり含まれ，多くの珍奇種が揃っている．なお，当時標本がほとんど存在しない幻の虫として，コレクションの目玉の一つだったオーベルチュールオオツノハナムグリ *Mecynorhina oberthuri*（図 3）も，今では数千円で売買されている．時代の流れと昆虫の希少性の激変を感じさせる種の一つである．

カミキリムシコレクション

高桑さんの主たる研究対象だったこともあり，県内外のカミキリ研究者との親交も深く，逝去された方からの寄贈標本では，当館甲虫コレクション中でもっとも充実している分野である．カミキリ屋が輝いた時期のコレクションが主となり，図鑑や本で記述される著名な標本も含まれており，非常に興味深い．各地で伐採が盛んに行われた 1970 ～ 1980 年代には普通種だった種や，フサヒゲルリカミキリ（図 4）のようにその後激減して種の保存法指定種になったものもある．これらを見ていると，「昔のカミキリ屋さんは，本当に幸せだったんだなー」と羨ましい気持ちを強く持つ．もっとも，今の若手から見れ

図1．クワガタムシのタイプ標本．

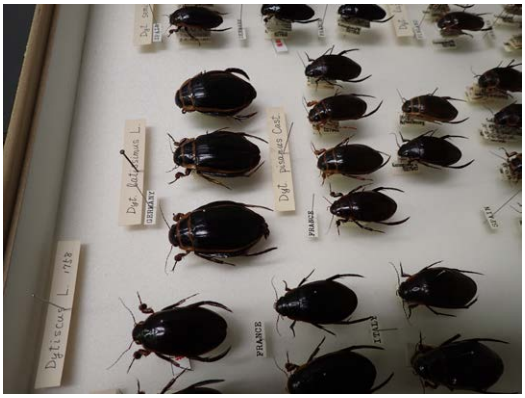

図2．*Dytiscus latissimus*．

図3．オーベルチュールオオツノハナムグリ．

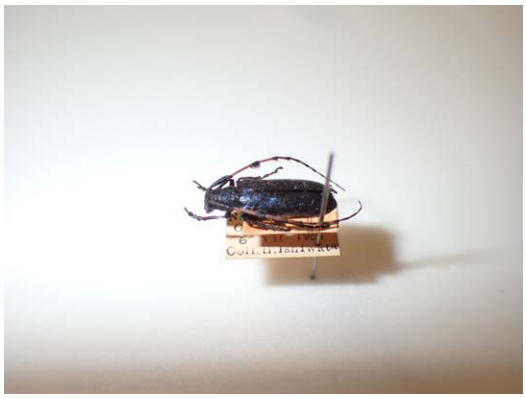

図4．フサヒゲルリカミキリ．

図5．山登コレクション中のヤンバルテナガコガネ．

ば僕らの青春時代でも，南西諸島もまだ土場が各地にあったし，採集規制はほとんどなかったのだから，羨ましいでしょうが．

大きなコレクションとしては，「木下オヤジ」と慕われた木下富夫さん，高桑さんの仲人でもあった窪田勝信さん，津崎満さんらの「実物日本産カミキリ大図鑑」の世界が広がっている．

地域の甲虫相のコレクション

地方博物館としては，地域の甲虫相調査の成果品の保管も重要な使命となっている．環境破壊が進行する中では，かつての「普通種」の中でも絶滅危惧種になっているものも多数あり，それらがかつて分布した証拠としても重要である．

丹沢総合学術調査での成果

平野幸彦氏を中心とした神奈川昆虫談話会の甲虫屋の最盛期の成果が残されている．現在各地で深刻化しているシカ食害が問題になった初期の地域でもあり，時系列での甲虫相変化を追える点でも重要なものとなっている．

山登明彦氏の桧枝岐周辺の甲虫コレクション

山登明彦氏が収集された福島県の桧枝岐周辺のコレクションで，現在とは比較にならない黄金期の桧枝岐の甲虫相を概観できる貴重なものになっている．山登氏が採集方法を開発した当時のヒメオオクワガタなどのコレクションも含まれている

が，ヤンバルテナガコガネの標本（図 5）が含まれていることは意外に知られていないだろう．山登氏はその卓越した採集能力でも知られた方だが，「山原で採集したバカでかいカブトムシの幼虫」が藤田宏氏の手で飼育され，1 ペアが羽化させられたもので，同じ秋にダムのライトに飛来したものが採集されていなければ，これが世紀の大発見だった，という話は有名である．すぐに天然記念物に指定されており，ホロタイプ以外に使える標本はほとんど存在しないので，時折展示のための貸し出しで活躍する．

図鑑執筆などで知られた中山周平氏のコレクション

戦前の川崎市麻生区柿生地域の里山を中心としたもので，甲虫も多数含まれている．山登氏のコレクションもそうだが，「すべての甲虫（昆虫）を網羅する」意図で収集されたもので，微小種を含めてその収集は多岐の分類群にわたる．すでに県内では絶滅したと考えられるコミズスマシ，ゲンゴロウなどが，現在，市街地が広がる川崎市に生息していた証拠となる貴重な標本になっている．

小笠原諸島の甲虫コレクション

筆者が 1980 年代から調査対象にしてきた地域のもので，筆者に献名されたカミキリ，クワガタのタイプ標本をはじめとして，長年継続した調査結果の標本で，おそらく全国一の規模だろうと思われる．普通には研究者も調査に入れない南硫黄島の標本などはとくに重要だろう．

以上，規模の大きなコレクションを抜粋して紹介させていただいた．虫屋の高齢化が進行する中での寄贈が増えており，これは今後ますます増加していくのだろう．親交の深かった方々のコレクション引き取りは，やはりつらいものがある．昨冬には，まさかの先輩学芸員の高桑さんのご逝去で，ご自宅に引き取りに伺うことになってしまった．現在整理を進めているが，高桑さんのコレクションは，たぶん多くの方が想像しているより分量的にはかなり少ないもので，大型ドイツ箱で 163 箱である（この他，樹脂容器などに収納された多数のタトウ標本があり，全国各地の同好の士からの頂き物が多いのも，高桑さんの交流の広さと深さを物語っていよう）．内容を見ると特定種を沢山採集するような釣り堀採集をほとんどしなかった行動もよくわかり，ネクイハムシや海外のナナフシなどのように，ほぼ数年間の標本しかなく，一時夢中になって，すぐ飽きたことが良くわかるコレクションもある（笑）．お人柄を偲ばせる内容にもなっている．人生の終盤の集大成の収集になってしまったコブヤハズの標本集積は目を引く．やはり標本は人生を語ってしまう，ということだろうか．

虫屋にとって自分の標本は，思い出そのものの存在であることを痛感する．個人的には，もう今では感覚が麻痺していて，何を採ってもほとんど感動することはなくなったが，青春時代の数年間を費やしたフェリベニ，ヤクネキなどとの出会いと興奮を鮮やかに思い起こさせてくれる標本は，やはり宝物だ．

読者の皆さんには，自分の宝物である標本の行く先は，元気なうちにきちんと調整しておかれることをお勧めする．残された家族は，標本の処理をどこに相談してよいかわからず，結局廃棄されてしまっている貴重な標本は少なくないものと思われるし，そのような残念な事例はごく最近も経験した．標本とともに，それを補完する貴重な観察記録である野帳の保管，標本とセットの寄贈も重要で，ほとんどの場合それらの資料はパーソナルなもの（家族にとってはよくわからないもの）として廃棄されてしまっていることも知っておいていただきたい．

なお，急増する標本の受け入れ作業は，我々学芸員の大事な仕事とはいえ，そろそろ作業量のリミットを超えてきている．相手がどこの保管施設にせよ，コレクションの寄贈を検討されている方は，事前に相談の上で，エクセルなどでデータベースを作成していただいていると，標本情報の引継ぎもスムーズに運ぶことができることが期待される．結果的に寄贈手続きも円滑に運ぶことができると思われるので，ぜひご検討いただければと思う．

（2017年12月5日受領，2017年12月12日受理）